

“ニェット”の効力

【訳者注】恐れずにアメリカの要求に対して“ニェット”と言うこと、そしてみんながこの拒否の声を大きくしていけば、アメリカは崩れるだろうという主張には説得力がある。ウソをつかなければならないのが嫌で、外交官がどんどんやめていき、米政府役人には精神を病むものが増えたという話は、なるほどと思わせる。政策全体がウソと隠ぺいで固められるということは、内部に病層を抱えるということである。アメリカはそれによって、戦わずして滅びるであろう。「ウォルフォウィッツ主義」（アメリカの上に出る者は、誰であろうと許さないというガキ大将主義）とか「アメリカ例外主義」（アメリカだけは国際法無視が許されるという思想）は、アメリカの傲慢病であり、いつかは陥る、自ら掘った穴である。

“ニェット”と言えば、安倍首相が、（ウクライナのネオナチの）ポロシェンコに挨拶して来いと言われたとき、“ニェット”と言うべきだった。あるいは“ニェット”と言わず従うなら、「韓信の股くぐり」という中国の故事を、アメリカに教えてやるべきだった。

Dmitry Orlov

July 27, 2016, Information Clearing House



この惑星上で物事が起こると考えられるときのカラクリは、次のようなものである——アメリカの（公的私的な）権力構造が、世界の残りの者たちにどうして欲しいかを決める。彼

らは、公式の、また非公式のチャネルを通じて彼らの希望を伝え、自動的な協力を期待する。もし協力が直ちに行われなければ、彼らは政治的、財政的、経済的な圧力をかけようとする。それでもまだ望み通りの結果が得られないときには、彼らは、カラー（色）革命とか軍事クーデタを通じて、政権交代を試みる。あるいは暴動を組織し支援して、それが反抗的な国家への、テロ攻撃か内乱に発展するようにする。それでもまだダメな場合には、彼らはその国を爆撃して石器時代に戻してしまう。1990年代と2000年代には、これがうまくいったのだが、最近、新しい力学が生じてきた。

初め、それはロシアが中心であったが、この現象はその後、世界中に広がって、アメリカそのものを呑み込もうとしている。それはこんな具合だ——アメリカは、ロシアにどうして欲しいかを決め、その希望を伝え、自動的な協力を期待する。ロシアは“ニェット”と言う。アメリカはそこで、上記のすべての手段を取るが、ただ爆撃まではいかず、これはロシアの核抑止力によって抑止される。答えは“ニェット”のままである。人はおそらく想像するだろう——誰かアメリカの権力構造内部に賢い者がいて、「目の前の証拠に基づいて、我々の条件をロシアの押し付けても埒が明かない、対等な立場で誠実にロシアと交渉しようではないか」と口を尖らせて言うのではないか。そう言えば、他の者たちもみな額を叩いて、「ワオ、それは素晴らしいやり方だ！なぜそれを考え付かなかったのだろうか？」と言うのではないか。しかし、そういうことは起こらず、それを言う者がいたら、その日のうちにクビになる。なぜなら、アメリカの世界覇権計画は交渉不可能だからである。そこで、何が起こるかと言うと、アメリカ人たちは狼狽し、もう一度相談して同じことを試み、全く滑稽な光景が展開する。

エドワード・スノーデンの紛糾した事件は、特に見ていて面白いものだった。アメリカは彼の送還を要求した。ロシアは「ニェット、我々の憲法はそれを禁止している」と言った。すると、西側の誰かが意気揚々と声をあげ、その報復として、ロシアに憲法改正を要求した！これは説明するまでもなく大笑いで迎えられた。これほど滑稽ではないが、シリアの行き詰まりもそうだ。アメリカは、ロシアに対しずっと、バシヤール・アル・アサドを倒す我々の計画に同調せよと要求している。ロシアは常に変わらず、「ニェット、それはシリア人が彼らのリーダーシップによって決めることだ。ロシアでも、アメリカでもない」と答えている。それを聞くたびに、アメリカは頭を搔いてまた同じことを試みる。ジョン・ケリーがつい最近もモスクワに現れ、プーチン、ラヴロフとともに、マラソン“交渉セッション”を行った。上の写真は、一週間かそこら前にモスクワで行われた、ケリー対、プーチンとラヴロフの会談の様子だが、彼らの顔の表情は読み違えようもない。ケリーはカメラに背を向けて、いつものようにしゃべっている。ラヴロフの顔は、「またしてもここに座って、この下らぬ話を聞かねばならんのか、やりきれないなあ」と言っている。プーチンの顔は、「なんと馬鹿な男だなあ、我々は何べんでも“ニェット”と言うにきまっているのに、分かるうとしない」と

は」と言っている。ケリーはまたしても“ネット”を携えて本国へ飛んだ。

なお悪いことに、いま他の国も割り込んできた。アメリカは、イギリス人に投票の仕方をちゃんと教えてやったのに、イギリス人は“ネット”と言って、EU離脱に賛成した。アメリカはヨーロッパ人に対し、大西洋横断貿易投資パートナー協定（TTIP）という、恐るべき大企業の権力掌握を受け入れよと教えてやったのに、フランスは「ネット、それは受け入れない」と言った。アメリカは、もう一つのトルコの軍事クーデタを組織して、エルドアンを、ロシアと仲良くする気のない誰かに取り替えようとしたのに、トルコ人はそれにも“ネット”と言った。そして今、恐怖の中の恐怖、ドナルド・トランプが、あらゆることに“ネット”と言っている——NATO、アメリカの雇用のオフショア、難民の波の受け入れ、グローバル化、ウクライナのナチスへの武器供与、自由貿易…

“ネット”が、アメリカの世界制覇という思想に対してもつ、腐食的な心理的効果は、過小評価することはできない。もしあなたが覇権国家のように考え、振舞う習慣になっていて、現実はそのでないのに、考える方だけがまだ働いているとしたら、その結果は認知障害であろう。あなたの仕事が、世界中の国を平伏させることであるのに、もはや誰も平伏しなくなったとしたら、あなたの仕事は冗談となり、あなたは精神病患者になる。その結果としての狂気は、最近、非常に面白い症候を見せ始めている。例えば、米務省の役人の何人かが、ある手紙にサインしたが、それは直ちにリークされ、バシヤール・アサドを倒そうと、シリアの爆撃を求める手紙だった。この者たちは外交官である。外交とは、話し合いによって戦争を避ける技である。戦争を要求する外交官は、外交を行ってはいない。彼らは外交官の能力がないのだと言うこともできる。しかし、それでは十分ではない。有能な外交官のほとんどが、2度目のブッシュ政権の間に辞職していったが、その多くは、イラク戦争の大義名分について、ウソをつかなければならないことに嫌気がさしたからだった。本当のところは、彼らは心を病んでいて、常軌を逸した、非外交官的な戦争屋なのである。このたった一つのロシア語の力が、彼らが全く文字通り精神異常になるほどに、絶大だということである。

しかし、国務省だけを取り上げてそれを言うのは不公平だろう。アメリカの政体そのものが、腐臭を放つ瘴気に包まれている。それはあらゆるものに浸透し、人生を惨めなものにしている。山のような問題にもかかわらず、アメリカのこれ以外のたいいことは、まだ何とか維持されている。しかしこの一つの問題——全世界に対するガキ大将のような振舞い——があらゆることを台無しにしている。今、真夏であり、国家が海岸にいてしよう。ビーチ・ブランケットは虫が食って糸が見え、ビーチ・パラソルも穴だらけで、クーラーの中のソフト・ドリンクは嫌な化学物質が入っている。そして読み物は退屈だ、…するとその近くで、巨大な死んだクジラが腐敗しかかっている。その名前は“ネット”といい、そのものが全環境を台無しにしている！

メディアのおしゃべり見出しと体制派の政治屋たちは、この時点で、この問題の存在に苦痛とともに気づく。そして予言できる彼らの反応は、彼らがその究極の根源だと考えているもの——便利なことに、プーチンによって人格化されたロシア——の罪にすることである。「もしあなたがクリントンに投票しないなら、あなたはプーチンに投票することになる」というのが最新の政治的標語である。もう一つは、トランプはプーチンの回し者だ、というものだ。どんな公的な人物でも、体制派のスタンスを取ることを拒否する者は、自動的に“プーチンの御用達バカ”とレッテルを貼られる。額面通りに受け取るなら、このような主張は馬鹿げている。しかしそれには、より深い説明がある。彼らすべてを結束させているのは、“ニェット”の力である。サンダーズへの投票は“ニェット”票である。民主党体制が一人の候補者を出し、彼女に投票せよと人々に言ったのだが、若者のほとんどはニェットと言った。トランプについても同じこと。共和党体制は“7人の小人”を連れ出して、人々にその中から誰でも選べと言ったが、公職にもつけない労働者階級の白人のほとんどは、ニェットと言って、白雪姫のアウトサイダーを選んだ。

ワシントンに支配された世界の全体を通じて、人々が“ニェット”の力を発見しつつあるのは、希望のしるしである。この体制は、まだ外面的には小ざれいに見えるかもしれない。しかし、その新しいペンキの下には、腐食した船体が隠れていて、あらゆるつなぎ目から水が浸み込んでいる。十分に大声の“ニェット”が響き渡るならば、船は浸水し、何らかの絶対に必要な変化のための空間が、突然見えてくるかもしれない。それが起こったとき、どうぞロシアに、あるいはそう考えるならプーチンに、感謝することを忘れないようにしていただきたい。

(ドミートリ・オルロフは、レニングラードに生まれ、1970年代にアメリカへ移住した。彼は *Reinventing Collapse, Hold Your Applause!* および *Absolutely Positive* の著者、奇跡的に人気のあるブログ <http://www.cluborlov.com/> に毎週、記事を書いている。)